



# 文化・経済フォーラム滋賀

## 提 言

第 16 回総会資料

(令和 8 年 (2026 年) 2 月 23 日 (月・祝))

# 近江のまつりの今とこれから

## —「共創の場」の再定義 地域文化としてのまつりの継承に向けて—

### はじめに 混迷する現代社会における「地域の文化」の価値

現代の日本社会は、急速な近代化、グローバル経済中心主義を経て、今やAI技術の飛躍的発展という波の中に揉まれている。その代償として環境破壊、人間性の欠落、さらには地域コミュニティの崩壊という深刻な課題に直面している。私たちは、かつてないほど豊かで便利な生活を手に入れた一方で、自らが生活する大切な「場所」の感覚や、他者との深い絆といった幸せの基盤を見失いつつあるのではないだろうか。

こうした閉塞感を打破する鍵は、実は私たちが暮らす「地域社会」にある。かつて、柳田國男、南方熊楠、折口信夫ら先駆的な民俗学者が、明治期の急速な西洋化に警鐘を鳴らし、日本人が本来持っていた心や風習の再認識を訴えた精神を、今こそ再評価するべきではなかろうか。

今回の提言では、文化・経済フォーラム滋賀としての視点に立ち、地域コミュニティの核である「まつり（祭礼や民俗行事）」が直面している現状を分析し、持続可能な滋賀の地域社会の未来に向けた提言を行いたい。

### 1. 日本の「まつり」が果たす精神的・社会的機能

古来、日本の「まつり」とは単なる地域のイベントや観光行事ではない。それは、日本人の精神構造、自然観、そして共同体の維持システムが凝縮された「聖なる秩序を共有する装置」である。

民俗学的知見によれば、まつりは「日常（ケ）」と「非日常（ハレ）」を切り替える重要なリズムである。柳田國男が説いたように、絶え間ない労働によって生命力が枯渇した状態（ケガレ＝気が枯れる）を、まつりという「ハレ」の場で神と共食（直会）し、エネルギーを充填することで回復させる。これは個人の精神的な再生であると同時に、地域社会（コミュニティ）の持続を担保する不可欠なプロセスであった。

また、折口信夫はまつりの核心を、外部から訪れる聖なる存在「マレビト」との交流や、魂を活性化させる「たまふり」にあるとした。さらに構造主義的視点に立てば、まつりは「自然と人間」「聖と俗」といった対立する概念を、神輿の巡行などを通じて一時的に混じり合わせ、混沌の中から日常の「秩序」を再確認させる機能を持つ。

社会的な側面では、マルセル・モースの「贈与論」に通じる互酬性・相互扶助の確認の場でもある。まつりにおける寄付や奉仕は、目に見えない絆を醸成し、精神的身体的健康や他者との関係性など、地域のレジリエンスを支える基盤となってきたのである。

### 2. 滋賀県における「まつり」の現状—アンケート調査が示す危機と希望—

しかし、こうした深遠な意義を持つ近江のまつりが、いま重大な岐路に立たされている。

令和7年度に実施（7月・8月）された「近江のまつりの今とこれから」アンケート調査（回答数103件）の結果は、現場の疲弊を克明に示している。

まず、まつりを支える中心層は60歳代が半数を占めており、次世代への継承が急務であることが裏付けられた。自治会加入率の低下も顕著であり、特に大津市などの都市部や新興住宅地では50～60%に留まっている。特筆すべきは、まつり催行の問題点として、資金不足（19件）よりも圧倒的に「人手不足（71件）」が挙げられている点である。また、「一部の人に役割や負担が集中している（51件）」という現状があり、特定個人の過度な献身に依存した体制の限界が露呈している。

さらに、コロナ禍は地域の伝統に深い爪痕を残した。一度中止や簡略化を余儀なくされた神事や芸能は、再開が困難になるケースが多い。例えば、地蔵盆をはじめとする各地の民俗行事は、2025年現在、多くの地域で自治会役員のみの方へと縮小され、住民交流の場としての機能が消失しつつある。一度「まつり」を省略する方向に舵を切れば、伝承されてきた技術や「畏敬の念」は急速に失われていくのである。

一方で、回答者の50%が「地域の大切な行事で、今後も続けていかなければならないかけがえの無いもの」と回答しており、困難な状況下にあっても、まつりを地域の誇りとして残したいという強い意志が共有されていることも事実である。

### 3. 持続可能な継承に向けた「まつりの再定義（アップデート）」

まつりの存続危機を乗り越えるためには、単なる「形式の保存」から脱却し、現代の生活感覚に合わせた「まつりの意義の再定義」が必要である。

#### ① 担い手構造を「血縁・地縁」から「系縁（けいえん）」へ転換

伝統的な「氏子」という閉鎖的な枠組みを超え、外部からの「関係人口」として、ボランティア（外国人を含む）、中高校の生徒、大学生、専門学校生、海外からの留学生などを積極的に取り込む仕組み作りが不可欠である。実際に、一部の地域ではクラウドファンディングによる外部からの資金調達や、他地域の自治会との協力によって担ぎ手を確保するなど、新しい共助の形が芽生えている。

#### ② 「保存」に固執せず「変容」を許容する

戦後に活躍した民俗学者宮本常一が説いたように、民俗文化は生活の変化とともに変わっていくのが自然な姿である。神輿の担ぎ手が足りなければ台車を使用する、露店にキッチンカーを導入する、女性や移住者の役割を積極的に拡大するなどしながらも、最も大切な行事を残すために、時代にあった「生きている文化」としてルールを組み替える勇気が求められる。

#### ③ 行政や観光客主導の「イベント」ではなく、住民の「当事者意識」を持つ

コロナ禍での中断は、これまで続けてきた伝統的な風習を振り返る機会となった。その結果として、残念なことに、形式的な儀礼のみを残すことになってしまった。最も大切な、みんなで楽しむ行事が、人々の接触の機会を無くすという目的のもとに、中止となってしまった。中には、形だけの中途半端な行事として、コロナ禍を理由にやめてしまうというケースもあったかもしれない。まつりは楽しく盛り上がるものでなくてはならない。まつりに関わ

る個々が主体性を持ち、何よりも当事者が「楽しむ」ことができる環境をデザインすることが、持続可能性の根源となる。

#### ④ 「畏敬の念」の再考、まつりの本質を共有する

日本のまつりの本質は、自然の恵みや、人間の力ではどうにもできない運命的な存在に対する「感謝」と「敬意」にある。効率や合理性のみを追求し、すべてを科学で説明できると思い上がる現代社会において、この「畏敬の念」こそが、私たちの傲慢さを戒め、他者や自然と共に謙虚に生きるための指針となる。

戦後、私たちが物質的な豊かさを追い求める過程で置き去りにしてきた「日本の心」を、まつりという体験を通じて次世代に体感させること。大人たちが真剣に祈り、熱狂し、共に汗を流す姿を子供たちに見せること。それこそが、単なる行事の継承を超えた、最も価値ある「地域文化の伝承」である。「畏敬の念」を抱き、地域の暮らしを慈しむ。このシンプルで、最も大切な心のあり方を、近江のまつりを通じて次の世代へと受け継いでいくことが求められる。

#### まとめ 継承のために最も大切なこと―「共創の場」をつくる

文化と経済は決して対立するものではない。地域の文化的な豊かさが住民の誇りを育み、その誇りが地域の魅力を高め、新たな経済の活力（人流や共創）を生み出す。私たちは、近江の地に受け継がれてきた「まつり」を、過去の貴重な地域文化遺産として守り、繋ぐだけでなく、移住者や他地域の住民を巻き込み、時代に合わせた変容を受け入れ、当事者が楽しむ仕組みをつくり、そして、日本の心である「畏敬の念」を後世へ伝えなければならない。「まつり」という大切な地域の行事を、未来の持続可能な地域社会を支える「共創の場」として再定義し、未来へと繋いでいく決意を新たに持つ。「共創の場」とは、企業、行政、大学、各種団体、NPO、個人など異なる背景を持つ人々が境界を超えて集まる場であり、多様な人々が、人口減少や環境、防災など大小様々な地域の課題に真摯に向き合い、解決に向けて動き出す機会となる。

「まつり」を共創の場と捉え、それぞれの地域で今の時代に生きた行事として繋げていくこと、それこそが、今、私たちに課せられた最大の責務であると考えている。

以上

(令和7年度提言研究事業コーディネーター

文化・経済フォーラム滋賀幹事

成安造形大学 芸術学部 教授 附属近江学研究所副所長 加藤賢治)

## ■提言とりまとめ経過

### 1 アンケート調査

県内市町の文化財担当・民俗文化財担当を通じて、県内のまつり（神社の例祭やお寺の行事、その他「オコナイ」「山の神」「地蔵盆」など伝統的な地域の行事）関係者を対象としたアンケート調査を実施した。

調査時期：6月～8月

対 象：県内のまつり関係者

回 答 数：103件

### 2 文化経済サロン

県内の都市部と農村部のまつりの現状と問題点をテーマに話題提供いただいた。

コーディネーター 加藤 賢治

ア 日 時：7月9日（水）14:00～16:00

会 場：びわ湖ホール研修室（大津市）

講 演：「近江のまつりの課題と展望①」

～都市のまつりの今とこれから 大津祭を対象に～

講 師：木津 勝（大津市歴史博物館副館長）、船橋 寛明（大津祭曳山連盟理事長）

イ 日 時：9月17日（水）14:00～16:00

会 場：びわ湖ホール研修室（大津市）

講 演：「近江のまつりの課題と展望② ～鎮守の神のまつりの今とこれから～」

講 師 市川 秀之（滋賀県立大学教授）

### 3 文化ビジネス塾（第18回）

県内の「まつり」に関するアンケート結果を踏まえ、令和時代の「まつり」のあり方について意見交換した。

日 時：11月3日（月・祝）14:00～16:00

会 場：滋賀県立文化産業交流会館第一会議室（米原市）

テーマ：「近江まつりの今とこれから～地域文化と経済の好循環をめざして～」

内 容：第1部「近江のまつりの今とこれから」アンケート調査結果を中心に

講師：加藤 賢治（文化・経済フォーラム滋賀幹事

成安造形大学教授 副学長）

第2部 シンポジウム

司会：高梨 純次（文化・経済フォーラム滋賀幹事

公益財団法人秀明文化財団理事）

パネラー：市川 秀之（滋賀県立大学教授）

高橋 順之（伊吹山文化資料館学芸員）

對馬 佳菜子（地域文化コーディネーター）

コーディネーター：加藤 賢治

共 催：滋賀県立文化産業交流会館（ビジネスカフェ in 文化産業交流会館）

公益財団法人滋賀県産業支援プラザ

## ■これまでの提言

2025年（令和7年）

公共建築を次世代に引き継ぐ～建築文化の振興をめざして～

2024年（令和6年）

地域拠点「劇場・文化ホール」～多様な人材の活躍が地域を変える、未来を創る～

2023年（令和5年）

博物館は地域社会に貢献できるのか

－近江国の文化財をどのように継承し活用するか、博物館の使命とは－

2022年（令和4年）

創造の現場に若い世代の活躍の場をつくり、地域の原動力に

2021年（令和3年）

アートを地域のプラットフォームに－文化と経済の連携を深める新しい視点の探究－

2020年（令和2年）

文化で滋賀を元気に！多様な人材を育む地域活動の推進

－アートを媒介として地域の人々を繋ぐ地域コーディネーターの育成と活躍の場の創造－

2019年（平成31年）

地域とアートをつなぎ、新たな文化を育む

2018年（平成30年）

地域文化を育む、新たな観光を創造する

2017年（平成29年）

世界遺産、無形文化遺産、世界農業遺産の登録等への取組みを

～地域の文化遺産を見直し、グローバルな評価へ～

2016年（平成28年）

新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ

2015年（平成27年）

自然・歴史・暮らしが統合された地「近江」の発信を

～“近江遺産”“近江八百八景”から日本遺産そして世界遺産へ～

2014年（平成26年）

滋賀の文化を発信する国民文化祭を早期に、スポーツイベントと連携した開催へ

2013年（平成25年）

文化・芸術・ビジネスの見本市としての国民文化祭へ

2012年（平成24年）

文化ビジネスの開発で滋賀の文化と経済に新展開を

\*提言は、ウェブサイト <https://biwako-arts.or.jp/rd/bunkakeizai/teigen> からご覧いただけます。



文化・経済フォーラム滋賀  
2026年「文化で滋賀を元気に！」する提言  
付録資料

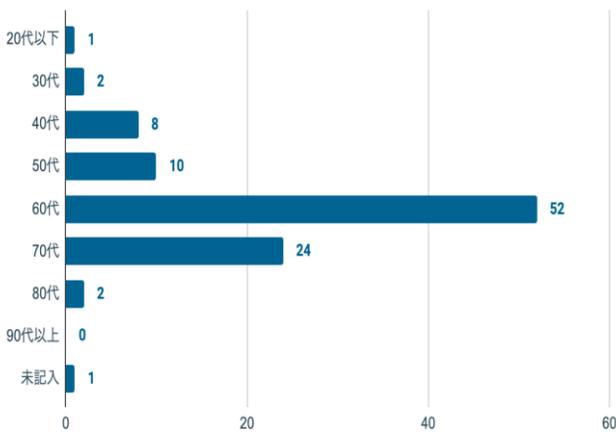
「近江のまつりの今とこれから」アンケート調査  
実施概要

調査時期：6月～8月

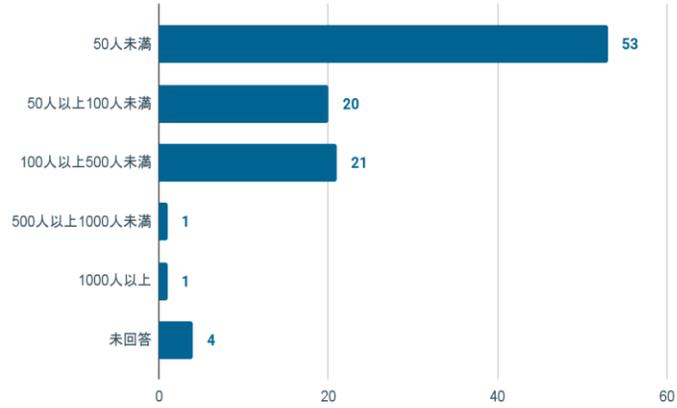
対 象：県内の「まつり」関係者

回 答 数：103件

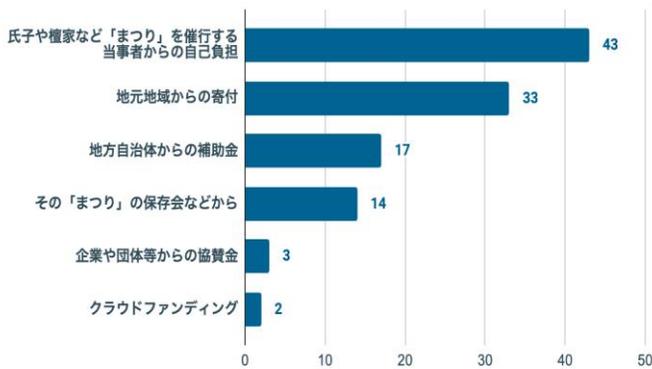
あなたの年齢を教えてください



「まつり」を催行するための参加者(スタッフ等)の人数を教えてください



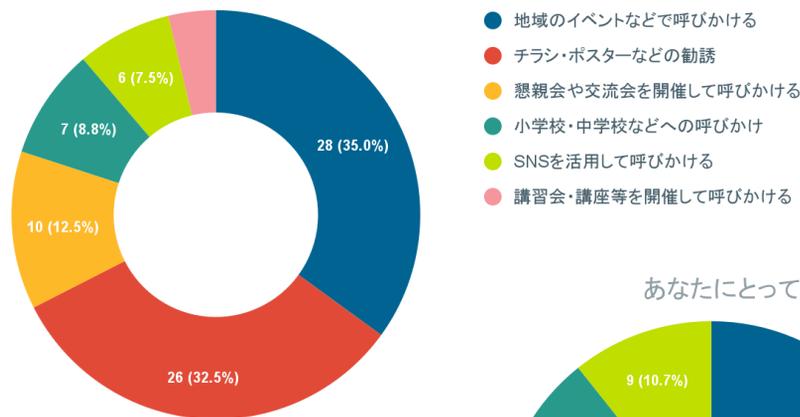
「まつり」を催行する際に必要な資金をどのように得ていますか (複数選択可)



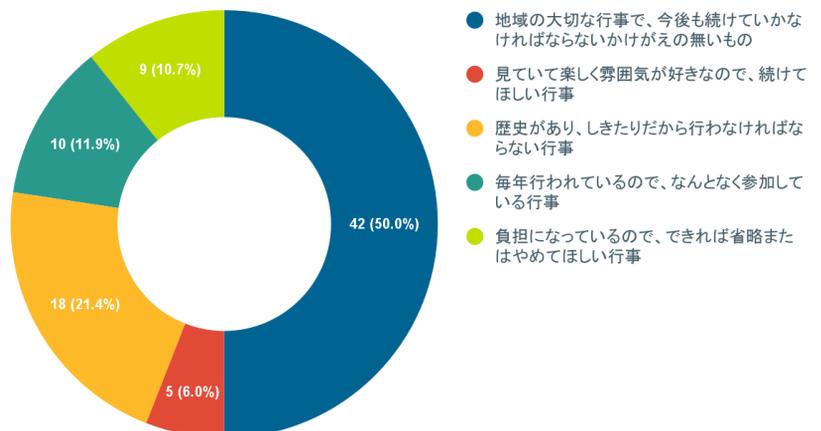
「まつり」を催行するにあたっての問題点を挙げてください (複数選択可)



「まつり」を催行するための「参加者(スタッフ等)」の人数を確保するための対策について教えてください



あなたにとって「まつり」はどのような行事ですか



## 自由記述のピックアップ

(16)「まつり」に関する問題点があったが、克服できた取り組みがあれば教えてください

- ・ 年間行事に位置づけ『係』として役員になってもらうように小さな改革を重ねてきている
- ・ 小学生の新加入は克服できていないが、PRとロコミを行っている
- ・ 担ぎ手確保には、ホープタウン芦浦の自治会の協力を得る事ができました
- ・ 力士を一部ボランティアに入っただき、（高齢化による）力士不足の補填で助かっています
- ・ 役員、組長、お世話係（輪番制）で、事前にお声がけをして対応。以前は23日24日の2日間の地蔵盆を現在は23日のみに縮小。また、以前は23日夜は商店街が歩行者天国となり、地域のイベントと連携していたので、人が集まりやすかった
- ・ 台車による神輿渡御行列
- ・ 1部の人に役割と負荷が集中していたが、露店はキッチンカーを手配、テント立ては業者に依頼している
- ・ 専門学生ボランティアとのパイプ作り。ただし、いつまで続くかは不明
- ・ 自治会員以外対象にポスター作成とQRコードでの直接申し込み
- ・ 祭事検討委員会での意見交換等で、問題点に対する共通認識や解決策の共有化で、今のところ継続されている
- ・ 子ども角力でマワシをしめることが嫌で、参加する子どもが少なくなっ時期があった。関係者が検討され、小学校の体操服半ズボンを着用しその上からマワシを締めることで解決した。以前は、祭りは男子が参加となっていたが、春祭りで、女子参加の花車巡行をする事で、祭りが賑やかになった
- ・ クラウドファンディングで資金調達 警備費を賄えた
- ・ 諸官庁より特に安全対策にかかわる指摘事項が近年強くなっている
- ・ 例祭のやり方がわからない。⇒写真で残すなど

(18) あなたの地域の「まつり」は、今後どうなってほしいと思っていますか

- ・ 拡大もせず縮小もせず現状維持。伝統文化として革新を進める世の中と共存できるものであってほしい
- ・ 担ぎ手不足の時は神輿の巡行にこだわらず、町内会向けのイベントなどを考えるべき
- ・ 歴史や伝統を受け継ぎながらも、地域住民の交流の機会として継承してほしい
- ・ 伝統は継承しつつも個人に負担がかからないようにし、気軽に参加できる楽しい行事になってほしい
- ・ 地域の絆を深める機会で、安心安全に暮らせる住みよい街づくりには欠かせないものとして、大切に続いてほしい
- ・ 伝統文化を継承していくために、幅広く参加者の募集が出来る仕組みを構築する（祭り保存会など）
- ・ 子供のためにあれば良いが、高齢者の意見が前面にでるところがあり、両者の思いが解離している
- ・ 子供の思いが反映されてほしい
- ・ コロナ以前のような祭事が行えれば良い。ただどんな形であれ、継続出来る方法を氏子総代等が中心になって考えていけば良い
- ・ 60年に一度の奇祭です。忘れてしまうので保存会を作り古き良き祭りを伝承すべく秋祭りと節分祭で奉納しています。何とか続けるべく会員が奇数月に2時間練習をしています。皆さんがワイワイ・ガヤガヤと楽しんでいます。楽しむ事が祭りの良いところだと思います
- ・ 老若男女問わず、誰もが参加できる全員参加型の行事になってほしい

(19) 「まつり」を催行するにあたってのコミュニティ（例えば、まつりの保存会や、町内会、自治会などの地域社会や団体）について何か思うことはありますか  
（大切なコミュニティであると思うかどうかなど、理由も含めて回答ください）

- ・ 神社の氏子としての意識も含めて、自治会、保存会 氏子組織が協力できる体制がほしい
- ・ サンヤレ踊り保存会は単独で存在していますが、自治会と連携すべきか迷うところです。単独は自由に行動できるが、自治会内では動きにくい。当面は単独が良いかな
- ・ 宗教も絡むので、なかなか積極的には言えないが、地域の行事として興味を持ってもらいたい
- ・ 古くからの住民と新規に転入された住民が、地域の歴史や文化に触れる行事を大切にしてほしい
- ・ 世代の継続。地域から子供会が無くなり、子供世代や若い親世代を地域活動に巻き込む機会が逸している現状に危機感を強く感じていたところにコロナで拍車がかかる。改めて、行政も交え、マンションなどの既存の町内会に属さない世代も含めた仕掛けづくりの見直しが必要と考える
- ・ 今年初めて神輿委員会があると知った。  
学区内に住んでいるが存在を知らずにいたので、同じように知らない人も多いのでは？  
決まった人だけが関わることになっているのかもしれないので、広くつたえられるようになるといいなと感じる
- ・ 祭を省略しようという方々が一定数おられるが、熱心に支えてくださる方もおられ、頼もしく思う
- ・ 仕事が主体であり、ほぼ関係役員と一部の団体で事業計画を消化している感じです。私もそうですが、今後さらにまつりの意義等薄れていく様に感じています
- ・ 地域住民が集まれる場がコロナ禍以降かなり少なくなってしまった。このようなまつりは続けて欲しい

(20) その他、「まつり」に関して思うところがあればご記入ください

- ・ 合理的に割り切れないものは何か別のもののせいにしてきた日本人。神の崇りだと祭礼を行ってきた経緯があるが、科学が発展してきたことの表裏で神に対しての信仰心は減ってきている
- ・ サンヤレ踊り保存会会員の多くは40歳代で、一般的にあまり地域活動に関わっていない年齢ですが、子供神輿の再開に関わったことは今後の地域活動の活性化につながると思います
- ・ 非科学的なことは置いておいて、なぜ引き継いでいくかが必要で、地域社会にどうメリットや影響があるのか知りたい
- ・ 是非、続いて欲しいものです。神社の神輿は担ぎ手が減りつつあるだろうから、新興住宅の人間は是非活用すべき。実家のほうの兵主祭りも人がおらず、かき番の地区が5年周期で回ってたが、地区合同で人確保にしきたり変更で対応したと聞く。柔軟対応しないと、廃れて消えるしかない
- ・ まつりや古い町並みは、止めたり壊したらそれまで。地域の大切な歴史文化として、宝として、次世代へ繋げて行きたいものです
- ・ まつりの起源は古からその地域の人達が伝えてきたが、住人は入れ替わり伝統文化に触れる機会も少なくなってきた。誰でも参加し易いまつりの催行、見て楽しい形にしていければ伝統文化の継承につながると思う
- ・ どの町を見てもコロナで中止となり、元に戻そうとするように見受ける。地域の氏神は神輿に乗り、住民みんなに元気か、頑張れよ、気をつけてね、とお声をかけていただいていると思う
- ・ 少子高齢化でどこの地域もまつりが少なくなっていますが、地域住民が集まれる場として長く続けられることを望みます

## アンケート調査 質問項目

- (1) あなたのお名前をご記入ください  
(アンケートの内容を公開する際に個人のお名前を公開することはありません)
- (2) あなたの年齢を教えてください
- (3) ご連絡先を教えてください(携帯電話の番号またはメールアドレスなど)
- (4) あなたが所属される自治会の名称をご記入ください。また、「まつり」の催行に関連して、字名、講中、町組などの組織に所属されている場合は、その名称もご記入ください
- (5) あなたが所属される自治会の加入率をご記入ください(概ねで構いません)。
- (6) あなたがアンケートにお答えいただく「まつり」の名称と催行される「日付」を教えてください。  
※ここで言う「まつり」とは、神社の例祭やお寺の行事、その他「オコナイ」や「山の神」「地蔵盆」などの伝統的な地域の行事を対象とします。
- (7) あなたと「まつり」の関係を教えてください
- (8) その「まつり」の所在地と規模を教えてください  
(「まつり」の基点となる神社またはお寺の名前と住所、氏子や檀家が暮らす字(あざ)の名前と住所。氏子や檀家の人数<概ねの人数で構いません>)
- (9) その「まつり」を催行するための参加者(スタッフ等)の人数を教えてください  
(ここで言う参加者とは、曳山の曳き手、神輿の担ぎ手、ボランティア、運営スタッフなど)
- (10) その「まつり」を催行するための「参加者(スタッフ等)」の人数を確保するための対策について教えてください  
(ここで言う「参加者」とは、曳山の曳き手、みこしの担ぎ手、ボランティア、運営スタッフなど)
- (11) そのお祭りの内容を教えてください  
(神事で特筆すべき珍しい行事・神輿の数・神事以外の行事(流鏝馬、子ども神輿、稚児行列など)
- (12) その「まつり」は、地域に伝えられてきた伝説と関わりがありますか。無い場合は無しと教えてください。伝説と関わっている場合は、どのような伝説かその概要と、伝説と関わるまつりの行事の内容も教えてください
- (13) その「まつり」を催行する際に必要な資金をどのように得ていますか
- (14) コロナ禍以降(最近)に、中止または省略した神事や行事はありますか  
(あれば具体的に書いてください)
- (15) 「まつり」を催行するにあたっての問題点を挙げてください
- (16) 「まつり」に関する問題点があったが、克服できた取り組みがあれば教えてください
- (17) あなたにとって「まつり」はどのような行事ですか(該当するものを一つ選んでください)
- (18) あなたの地域の「まつり」は、今後どうなってほしいと思っていますか
- (19) 「まつり」を催行するにあたってのコミュニティ(例えば、まつりの保存会や、町内会、自治会などの地域社会や団体)について何か思うことはありますか  
(大切なコミュニティであると思うかどうかなど、理由も含めて回答ください)
- (20) その他、「まつり」に関して思うところがあればご記入ください